

17

九下

春日秋

三上北見 吉



海かののみすべと空しとよおごとく白牙風
過く春日の出窓に

目を上げよ砒上のうてな今山朋の志心ことご
とく空しやを知ら

梅ふく四月の風の花さ朝あれ等別れは
たみはすけり

江樓の下にうなわれ思ふことわか花す日は
いづれにありわ

上徳わたる風はみえらの日玉を吹く日玉より遠さ
思ひ心をあく

33

早暮のまじる海しと遠くとかすめる室に
とび一つ見ゆ

心ちぎ身にもあはれは知ら小けり沖の夜涼
の 網師の声に

秋立つと丘べの松に啼く蝉の二五の湯とさ
みおろされぬる

悔ゆること更うにちいしといひとの唇さ
へも苦かり秋かな

秋風はところの傷を吹くことし酔はず深夜
のすかつきを措く

わか生はドンキホーテの馬かとも夜笑き夕
キレか直ぐを知らなく。